

- John Marenbon, *The philosophy of Peter Abelard*. Cambridge: Cambridge University Press, 1997.
- 5) J. Brower and L. Guilfooy (eds.), *The Cambridge Companion to Peter Abelard*. Cambridge: Cambridge University Press, 2004.
- 6) James Burge, *Heloise & Abelard: A New Biography*. London: Profile Books, 2003.
- 7) エチエンヌ・ジルソン『アベラールとエロイズ』中村弓子訳, みすず書房, 1987年。マリアテレーザ・フマガリ＝ベオニオ＝ブロッキエーリ『エロイズとアベラール——ものではなく言葉を』白崎容子・伊藤博明・石岡ひろみ訳, 法政大学出版局, 2004年。
- 8) Jean Jolivet, *Arts du langage et théologie chez Abélard*. Paris: Vrin, 1969; David Luscombe, *The School of Peter Abelard: The Influence of Abelard's Thought in the Early Scholastic Period*. Cambridge: Cambridge University Press, 1969.

Dominik Lusser,

*Individua Substantia: Interpretation und Umdeutung des
Aristotelischen ousia-Begriff bei Thomas von Aquin und
Johannes Duns Scotus,*

Peter Lang, Europäischer Verlag der Wissenschaften, 2006, pp. 251.

福田 誠 二

本書はBaden-Württemberg州のWeilheim-BierbronnenにあるGustav-Siewerth-Akademieに2004年に提出された修士論文に加筆修正が加えられ、Peter Lang出版によって新しく創刊された哲学的叢書『Ad Fontes』の第一巻として出版されたものである。著者であるDominik Lusser氏は2004年現在、Universität Freiburg (Schweiz)のカトリック神学部で研究中の学徒である。著者によれば、中世スコラ学盛期にアリストテレス哲学を受容した代表的思想家であるトマス・アクイナス(1225-1274)とヨハネス・ドゥンス・スコトゥス(1265/66-1308)とは共にキリスト教神学者として多くの点で共通の基盤に立つ思想家であるが、アリストテレス哲学受容に際して、その形而上学の中心概念の一つである「実体」概念に関しては、両者の理解には大きな相違が存在しているとのことである。本書はアリストテレス由来の、トマスとスコトゥスの「実体」概念の相違とそ

の根拠を形而上学の観点から比較検討したものである。

本書の概要を紹介すれば、第一章では「形而上学と実体」というタイトルのもとで、13世紀西方ヨーロッパにおけるアリストテレス形而上学復興という経緯のなかで、アリストテレス形而上学由来の「実体」概念がトマス・アクイナスとヨハネス・ドゥンス・スコトゥスによってどのように受容されたかが両者の形而上学に即して吟味される。著者によれば、トマス・アクイナスは、主として、「存在の類比 (analogia entis)」説に基づく「存在-神学 (Onto-Theologie)」としてアリストテレス形而上学を受容したのに対し、ヨハネス・ドゥンス・スコトゥスは、主として、「存在の一義性 (univocatio entis)」説に基づく「超越の学 (scientia transcendens)」としてアリストテレス形而上学を受容しているとのことである。第二章では、「存在理解と実体」というタイトルのもとで、中世スコラ哲学における「存在への問い」というコンテキストで、トマス・アクイナスによる「存在 (esse) と本質 (essentia)」の厳密な区別、及び、すべての存在させられたものが「自存する存在自体 (ipsum esse subsistens)」を分有すること、及び、「存在の現実態 (actus essendi)」によって現実化させられるという「存在と実体」に関する理解と、ヨハネス・ドゥンス・スコトゥスによる、非必然的に存在するもの及び有限に存在するものに関する存在性を「存在することに対する無矛盾性 (non repugnancia ad esse)」という規定によって構成する「存在性と実体」理解に関して検討が加えられる。第三章では、両者の存在理解に基づく「実体の内的構造」及び個の実体における「個別化の原理 (principium individuationis)」に関する見解とその理拠が吟味され、最終的に、トマスとスコトゥスの実体理解の射程とその妥当性が考察されている。

著者 Lusser は「形而上学と実体」の章で次のように述べている。よく知られているように、トマス・アクイナスは現実態と可能態の区別というアリストテレスの実体理解に忠実に沿った立場から出発し、この区別を存在するものにおける実体と偶有性の存在様態の区別に一貫して適用することによって、アリストテレスの存在理解を拡張する実体理解を示している。トマスはその形而上学全体を「存在の類比 (analogia entis)」概念によって表現しているが、彼の形而上学の到達点は存在するすべてのものの第一原因を探求することであり、それは最終的に「純粹現実態 (actus purus)」を規定することであり、言うまでもなく、それはアリストテレス自身が「第一哲学」の課題としてきた事柄である。その上で、トマスは存在するものの現実性とは存在自体の現実化する行為に与る、その純粹な現実性を「存在の類比」下において分有することにあると考えている。それ故、トマス

の形而上学においては「存在するもの (ens)」自体に中心があるのではなく、「存在 (esse)」ないしは「純粹現実態 (actus purus)」自体に中心があると考えられる。一方、スコトゥスによれば、形而上学とは本来、「超越の学 (scientia transcendens)」であり、神と被造物あるいは実体と偶有性という、あらゆる学の対象としての存在するもののカテゴリーを超える理拠であるべきと考えられている。それ故、存在するものはすべて純粹な無に対する「存在の一義性 (univocatio entis)」の下において、「存在することに対する無矛盾性 (non repugnantia ad esse)」という最終的な存在性を有するものであると考えられている。従って、この理拠下において「現実態と可能態」、「必然的なものと非必然的なもの」、及び「無限な存在と有限な存在」等のあらゆる存在性を規定するカテゴリーを超えた、存在するものすべてに関する超越的存在性の固有性に関する視点が開示されることになる。

さらに、著者 Lusser は「存在理解と実体」の章では次のように述べている。トマスとスコトゥスの存在理解と実体理解とは両者のキリスト教神学における創造理解がその理解の基礎となっていると考えられるが、トマスは「具体的に存在するもの」における「存在」の超越論的意味を「存在するものの内的な規定としての本質」という観点からではなく、ひたすら、「存在そのものの現実態 (Akt des Seins)」という観点からのみ理解する。可能態である本質は常に全くの可能態性に留まるに過ぎず、具体的に存在する個物の現実性とはもっぱら存在そのものによって担われていると考えられる。「純粹現実態」及び「自存する存在そのもの」である神が具体的に存在するすべてのものを創造し、存在させているのであり、すべての個物は「分有」によってこの神に依存している。他方、スコトゥスによれば、我々の認識は非必然的で個別的に実在するものに向かうのであるが、「存在するものとしての存在するもの」の学としての形而上学は現実態を支える可能態の構造を探求する超越の学であり、それらの存在性が持つ内的形相性へと向かう学である。最終的に、この学は神の知性の認識のなかにそれらの根源を求めることになる。それ故、諸々の存在するものを持つ存在性とは現実実在する存在性だけでなく、実在においては無であるが論理的及び可能的な在り方においては無ではなく存在するもの (esse intelligibile seu esse deminutum) の固有の存在性をも視野に捕える。それ故、スコトゥスの形而上学においては、形相の最終的現実性を表示する「存在することに対する無矛盾性 (non repugnantia ad esse)」という存在性が規定されるが、それは、個物としての実体とはこれらの存在性が形成している一性の謂いということになる。

最後に、著者 Lusser は「個の実体の内的構造」ないしは「個別化の原理」の章で次のように述べている。トマスは質料的実体の存在論的構成という観点から、現実に存在する個物の持つ最終的な個性は類や種から由来するのではなく、「現実化する存在行為 (Seinsakt)」自体が現実に存在する個物の唯一の個別化の原理であるとする。これに対して、スコトゥスは現実に存在する個物を構成する種々の内的な存在性という観点から、それらが「存在することに対する無矛盾性 (non repugnantia ad esse)」である限りにおいて「事物の劃からの形相的区別 (distinctio formalis ex natura rei)」という原理によって各々の存在性に固有の形相性を認める。現実に存在する個物には個性を規定する一つのヒエラルキーの秩序のもとに種々の存在性が存在しており、この秩序は最終的に「このもの性 (haecceitas)」という概念によって表現される。この結果、類、種、種差、あるいは、質料、形相、実体、偶有性等の如何を問わず、それらはそれらに固有の各々の存在性に適合する規定的な現実性を有することになり、最終的に、究極の個性によって規定された個物が固有の存在性を持つことになる。しかしながら、これはまだ実存 (Existenz) としての存在性ではない。個物は個的存在性の種々の段階において規定されるのであるが、それでも尚、その個物は可能態の段階に留まっている。個物における最終的に到達されるべき実存とは、神の創造行為によって可能態が「現実的な現存在 (das wirkliche Dasein)」へ高められることを待たねばならないことになる。以上から、著者 Lusser によれば、トマスはアリストテレスの実体理解を「解釈 (Interpretation)」しながらキリスト教神学に適用しているのに対して、スコトゥスはアリストテレスの実体理解に一つの突破を齎す「再解釈 (Umdeutung)」を行うことによって新たに展開しているということである。

蛇足ながら、私見を述べれば、実体に関して形而上学の観点からのみトマスとスコトゥスの思想を比較検討すれば、このような結果となろうが、両者は本来的にはキリスト教組織神学者であり、各々、独自の神学的構想によって形而上学を展開していることをも考慮すれば、実体をめぐる各々の形而上学の内的必然性がより一層明確になると思われる。キリスト教組織神学の中核となる神学は三位一体論とキリスト論であるが、それらを一貫して論じる概念が「ペルソナ概念」であり、それはすぐれて「実体」概念に纏わる議論である。よく知られているように、トマスは、アリストテレスの実体概念に忠実なポエティウスのペルソナ概念：「理性的本性の個別の実体 (rationalis naturae individua substantia)」を直接用いて三位一体論を展開するが、それは、トマスが最高の学と考えるア

リストテレス形而上学によってキリスト教神学を根拠づけようとするからである。被造物から得られた概念を神に適用しながら、神と被造物との存在論的差異の識別を通して徐々に神へと上昇する「下からの神学」であるトマスの神学においては、最終的に、父なる神のペルソナと子である神のペルソナの各々の基体はあくまで「個の実体」であり、それらは「存在の類比」のカテゴリーにおいて理解される関係性で把握されることになる。これに対して、スコトゥスは、リカルドゥスにならって、ペルソナ概念を「知性的本性の非交流な実存 (intellectualis naturae incommunicabilis existentia)」と定義する。この場合、ペルソナ概念の基体は「非交流な実存」であり、ここにはすでに「交流する実存」という概念が前提とされている。「交流する実存」とは「愛の交わり」という聖書における三位一体に関する啓示そのものの概念のスコラ的な表現であり、アリストテレスの「実体」概念から見れば、「解釈」された概念というより、ほとんど別の概念といってよいほど「再解釈」された概念である。それは、スコトゥスがキリスト教神学の源泉である聖書における三位一体の啓示そのものから「ペルソナ概念」を汲み取ろうとするからであり、被造物はその「似姿」であると考ええるからである。スコトゥスの神学構想はいわゆる啓示の神から下降する「上からの神学」ないしは「神の受肉の神学」と呼ばれるものである。トマスとスコトゥスという中世を代表するキリスト教組織神学者の、各々の神学構想全体から見れば、両者のアリストテレスから由来する形而上学と「実体」概念の相違に関する各々の内的必然性の相違も一層明確に理解され得ると考える。